

ほのぼの

第20号

平成20年

11月

発行

神戸市須磨区戎町1-2-3

TEL 078-732-5209

信行寺門信徒会

生きていますか

信行寺住 職

「青年よ、君はまだ若い。やがて時がたてば、君の考えも変わり、今君が信じていることの多くは、むしろその反対を正しいとするようになるだろう。だからその時まで待つて、大切



国宝 安城の御影
親鸞聖人 83歳の寿像

なことを判断したまえ。しかも、その大切なことというのは、君が今なんでもないと思ってるそのことこそそうなのだ」と古代ギリシャの哲学者プラトンは言っています。

若いときは、はちきれりような体力と気力にあふれています。しかし、悲しいことには、人間は力があると自分では気づいていなくとも、驕慢な心が沸いて

います。体力や知力、経済力や政治権力など。織田信長、豊臣秀吉にその典型を見ることができます。

そこまでいなくても、若い時は、自信にあふれていますから他人の言葉が届きにくい。聞き入れられない。古いものはダメだと否定、新しいものを求める。新しければいいのだという感覚で。誰にでもある若い時の姿です。

では、「若い」とはそれだけのことでしょうか。ばくぜんと未来に向かって可能性をもっているというだけで「若さ」をとらえ、その可能性のためだけに新しさを追求する。ならば、「若さ」とは、年齢の多少だけの話です。身体の若さのことで。 (次のページに続く)



合掌

(前ページより)しかし、「若い」ということには「身体の若さとは別に「心の若さ」があります。これは年齢に関係ありません。プラトンが「まだ若い」といったのは、旧知の惰性に流されず、「新しいことを取り入れる力」を持って、日々を生きていることではないでしょうか。親鸞聖人は、「これは何ごとぞ」と思いかえしながら生きてゆかれました。生きるとは、新たに生まれることです。日々生まれることです。それが南無阿弥陀仏です。年齢に関係ありません。

仏壇と信仰

副住職

「千の風」という歌が、多くの人の共感を呼びました。

「私のお墓の前で泣かないでください。そこに私はいません。眠ってなんかいません。……」

しかし、実際、私たち日本人の多くは「死後の住処はお墓」というイメージを持っているように思います。また、仏壇も亡くなった方々がおられる場所だと思っており、ご本尊の如来様に手を合すというよりも、亡くなったおじいさんやおばあさんに手を合すという感覚の方が多いのではないのでしょうか。はなはだしいのは、如来様のお顔が見えないように、過去帳を置いている方もおられます。

ですから、本来ならば、信仰のより所としての阿弥陀如来様が仏壇の中心であり、信仰生活の中心である

べき存在なのですが、家族の誰かが亡くならない限り、仏壇を家に置いてはいけないものだと思解しているようにも見受けられます。

ある知人の話ですが、その方は先般ご主人をガンで亡くされました。お葬式をする段になって初めて、家の宗派が浄土真宗だと知って、いろんなことを相談してこられました。

ご主人が長男ということもあって、先祖代々の仏壇がマンションに送られてきました。しかし、その方は仏壇とどのように接したらいいのか困っていました。浄土真宗では他宗のようにお位牌を作る必要がなく、過去帳に法名を書きます。初めは、お位牌が無いということをも心もとなく思われたようで、お位牌を作らなくても本当に大丈夫なのだろうかと心配されていました。

そして、「それでは、何に対して手を合わせるのか」と聞かれました。

「ご本尊の阿弥陀如来様ですよ。」

お位牌に亡くなっ方の魂が宿っていると考えている人が多いようですが、それは浄土真宗の考えではないですよ。仏壇は阿弥陀様のお浄土を表しています。自分自身の心のより所となる真実の世界を表しています」と答えると、あつけにとられた様子でした。

今まで仏壇の無かった方にとって、家庭には信仰の表れとして、如来様を仏壇に安置するという考えがないのです。

縁あってお寺に育った私にとつては、如来様に礼拝するという行為は小さい頃から当たり前のことでした。それは、単に亡くなったおじいさんやおばあさんに手を合わすということではなく、亡くなった人を偲ぶというを通して、如来様に手を合わせ、如来様の私への思いを聞くのです。もし、仏壇にお供えしなかったり、読経しなかったら、亡き人が

悲しむとか、たたるとかの気持ちです

るのなら、仏壇は自分の心のより所になりません。ですから手を合す時には、亡くなった方々を偲ぶだけでなく、家族や

大切な人の「死」

を縁として、自分自身の「いのちと人生」を見つめ直すことが大切だと思います。その時、私たちは「光といのち」のきわもない如来様の声を聞くことができます。



合掌

名札で交流!!

秋の彼岸法要にお参りに行った時のことです。受付で名前を言うと、名札を渡されちよっと戸惑いました。探すのに多少の時間がかかりましたが、自分の名前があつてほっとしました。胸につけると、私も御同朋の仲間入りしているのだなと思つと何か気持ちが改まって、誇らしい気分がします。

最近は大きな病院に行きますと、医師や看護師の皆さんは名札を下げています。その施設の関係者ということ、外来の人にも分かるように取り計らわれているでしょう。

私も信行寺さんにお世話になって、7、8年近くになるうかというのに、同じ法座の皆さんのお名前が分かりません。特に「ほのほの」の編集をしておりますのに、ご投稿くださる方のお名前だけで、お顔が浮かんでこなくて、お会いしてもご挨拶申しあげず、大変失礼致しております。この名札が、皆さん方とのお近づきの縁ともなればと願っております。

(森本 記)

秋の彼岸法要

あれほど暑かった夏の気候が、急に涼しくなった9月27日28日の両日、秋の彼岸法要が勤修されました。多くの参拝で本堂が満杯の盛況の中、住職及び天岸先生の有難い法話をいただきました。



この間「敬老の日」がありました。百歳以上の人が、三万人を越えたそうです。まだこれからも増えます。毎年自殺する人が三万人以上あります。死んだ人が三万人以上いて、自殺に失敗した人や、自殺の願望をもった予備軍は六万人以上いるそうです。ちよつと異常やと思いませんか。現在「私は無宗教です」という人が多いですね。これがハイセンスやと感違いでいる人が多い。私らが物事を判断する時、何を拠り所に判断しますか。善か悪か、賢か愚か、上か下かなど。これは自分の過去の経験に基づいて判断しているのと違いますか。これを自分教といいます。一方に経済教というのがあります。金さえ儲ければそれでいいという。良いとか悪いとかの判断を、金銭的な価値観で判断するような、自己中心的な考えが増えているのです。このように経済的なメタボにならないように、何が一番大事かを考える時になってきております。



現代は自信過剰の時代といわれております。自信を持つことは悪いことではありませんが、それが過剰になると「うぬぼれ」になります。自分の考えが正しいとすると、それに反する他人の考えは間違っているということになります。自己中心的な考えになり、動物と一緒に、自分だけ良ければいいとなり、他を思い計る心に欠けるのです。それに人間は、いつも幸せでなければならぬという願望を持っております。だから病気になる、貧乏になったり、死ぬことになると苦しんだり悩んだりするのです。悩みや苦しみの時だけの宗教ではなく、もつと長いスパン（時間的な幅）で人生をみるのが大事なのです。

ご縁をいただいたりて

波多野敏夫

娘が勤務先でお世話になった中川さなみさんからご紹介いただき、信行様のご法座を聴聞させていただきましたようにになりました。

私の故郷は、世界遺産に登録された《大森銀山》に比較的近い、石見地方の山間部に位置する町です。私が子どもの頃には、報恩講が営まれる期間や秋祭りには、多くの出店が並ぶほどの賑わいあった町でしたが、最近では過疎化と高齢化がすすんでおります。石見といえば、有福の善太郎さんや温泉津の浅原才市さん、江津の小川仲造さんといった妙好人の方々がよく知られており、ご法義に篤い土地柄です。

その故郷の真宗門徒の間で歌われ

る『四十八願のうた』を紹介させていただきます。

- 一 四十八願成就して、花の浄土を創り上げ 十劫この方今日までも、待ち焦がれたるこの弥陀は
- 二 可愛い衆生を暗闇に、浮きつ沈みつ苦しませ、どうして弥陀が極楽に、一人衆々居らりようか
- 三 汝が地獄に落ちるのを、よそと眺める親じゃない、汝一人を落としやせぬ、落ちりや弥陀のお手の上
- 四 それ程思うこの親を、汝は見捨てて何処へ行く、地獄や餓鬼の隅までも、大悲の綱を敷きたれば
- 五 逃げる道は無きゆえに、いやではあろうがこの弥陀に 唯一声に親様と、汝が喜ぶ笑い顔
- 六 一時も早く見たいぞと、呼んで

くださる親様の、お慈悲の底をいただけば、ああ有難や我はいま

七 障りのままに救われて、西の浄土に参るなり、

ああ有難や 南無阿弥陀仏
ああ尊しや 南無阿弥陀仏

故郷の、お念仏を喜ばせていただく環境の中で育てられたこと、そしてまた、この神戸で信行様にご縁をいただいたことに感謝して、聴聞を重ねていきたいと思っています。

合掌



第26回夏期特別法座

久 納 惠 弘

第26回夏期特別法座が平成20年8月18日(月)午前11時より「シーパル須磨」にて開催され、今年も門信徒40名の方々が参加されました。住職からは『浄土仏道の真実』との講題で、法話を拝聴させていただきました。お昼の会食の後、コーラス部「みやび会」の皆さんによる仏教讃歌後、門信徒の皆さんと共に「翼をください」及び「浜辺の歌」の斉唱がありました。午後からの休憩時に、恒例の「ヨガ健康体操同好会」の有志による「肩ほぐし体操」などもあり、和やかな雰囲気の中で有意義な一日を過ごさせていただきました。

夏期法座を終えて

今年の夏期法座はちょうど北京オリンピックの最中でした。開催前から何かと話題の多い大会でした。オリンピックは平和の祭典と言われていた時代が懐かしく思い出されます。

さて私ども、日暮しの中でも高齢化が頂点に達してきたようで、そのうち終末高齢者と呼ばれるようになるのではないかと不安を感じる昨今です。そしてこれ



を支える若い家族のこと等々、避けて通れない社会現象が山積しており不安がいつぱいです。折りしもこの度の法座では、釈尊が仏道を歩む難しさをお弟子に説かれていたところでした。法を誹謗する者、五逆罪を犯す者、一闍提(せんたい)、この三種を病に例えての治し方の難しさでした。人は生まれたからには必ず死に至るのが道理であるが、病と老いを迎えるなければそこに至ることが出来ない。折に触れ聴聞させていただいているのに不安の毎日で、今更ながらわが身の凡夫を思い知らされております。何はともあれ、日ごろの法座にはできる限りご縁を頂きますよう。

(長井 記)



茨木西組連研のご一行

生憎の雨の日の六月二十九日、茨木西組連研の皆様（三十余名）が、信行寺にお参りに来られました。心配していた雨も止んで、喜んで接待しました。老若男女、色々のタイプの住職様方でした。本堂では、信行寺住職より「震災から再建にいたるまで」の説明があり、引き続き礼拝堂で震災時の写真を熱心に見ておられました。想像以上に規模の大きい地震が、神戸の町を灰燼にした惨状に、一様に驚きの声が上がりました。

「よくここまで再建された」という賞賛の声と、住職を初め門徒の方々の並々ならぬご苦労を労う言葉を給われました。「お寺はお念仏を伝える道場」と常々住職が申されていた言葉通り、立派に再建することは、信心の思いを形でもって如実に表していると、今更ながらに身を感じました。皆さまご苦労さまでした。

（泉井 記）



南無阿弥陀仏に救われて

利井 てる子

私が二十五歳の頃肺結核を患い、自分の心の悪性に悩んでおりました時に、御法義に篤いお方から初めて「阿弥陀様」の名を聞き驚きました。私は禅宗の生まれで、お釈迦様のみ名は知っておりました。阿弥陀様は、どのような者でもわが子であるから捨てずにお救い下さる南無阿弥陀仏のおいわれを聞いて、そんな仏様があるのか疑問に思いました。今からではもう遅いと悔やまれましたが、「あんたはまだ若い、今から聴聞させていただくのよ」と言われ、お寺参りの日暮しが始まりました。住居を豊中から神戸の自宅に移し、聴聞が続いておりました。ふと気がつくと、信行寺の前坊守様が、私と同じ所へ聴聞に連れて行きました。途中で、自分の信心に自信がもてず、悩み苦しんでおりました折に、お同行の清水さんに誘われて、広島藤解和上を尋ねて、初めて法林寺に参らせていただきました。和上のお話を聞いておりましたが、「聞いたりしますか、知ったりしますよ」という邪見が浮かび、素直に聞くことができず、自己嫌悪に陥りました。和上に、私のこの心を打ち明けますと、にっこりされ「その者をお助けぞ。いま分からなくても必ず分かる日が来るであろうぞ。その時は転げまわって喜ぶであろうぞ」と諭されました。九十二歳の和上様は、お弟子の田口様に「利井を頼むぞ」といわれたので、それ以後毎月利井宅で、一泊二日の御法座が始まりました。信行寺の前坊守様も熱心に聴聞に連れられ、法座が終わると必ず講師室に行かれ得心するまで尋ねておられました。後日、前坊守様がご往生なされ、その時のご様子を和上様にお伝えすると、「そうでしょう。大往生です」と申され、大変喜ばれました。

合掌

報恩講のご案内

今年も早報恩講をお迎えする季節となりました。

親鸞聖人は弘長二年、旧暦で十一月二十八日（正午）にご往生になりました。これは新暦で一月十六日に当たるといので、明治初年からは一月九日より十六日までの一週間（七昼夜）ご本山において御正忌報恩講がとまっています。

ただしすべての寺院や家庭が同時にとめるわけにはいきません。それで門信徒、末寺の報恩講は、前年の秋ごろから次々とおつとめし、できれば年内に完了して、御正忌にはみんなが揃ってご本山にお参りできるようにしたのです。（取り越して一月より前にとめるため、「お取りこし」ともいいます。）信行寺でも、これにならつて十二月に二日間にわたつて勤修されます。

報恩講（午後二時より）

十二月十三日（土）高田慈昭先生
十二月十四日（日）住職

ご家族知人お誘い合わせご参拝くださいますよう。



新春初法座

平成二十一年一月五日（月）

新しい年を迎えて、初の法座です。一年の生活信条を阿弥陀さまにお誓いしましょう。（午後一時より）

ヨガ体操を始めませんか

信行寺では毎月第二・第四の木曜日午後2時より3時半まで、指導の先生を招いてヨガ体操をしています。美容と健康のために、皆さん方のご参加をお待ちしております。初めての方もご遠慮なく

編集後記

平成十四年七月に創刊以来、早20号になりました。この間皆様のご協力のお陰で、内容が少しずつ充実してきたかと思いますが、いかがでしょう。これからも、皆さまの積極的な投稿により、更に内容が充実し、親しまれる「ほのぼの」にさせていただきます。

（月田 記）